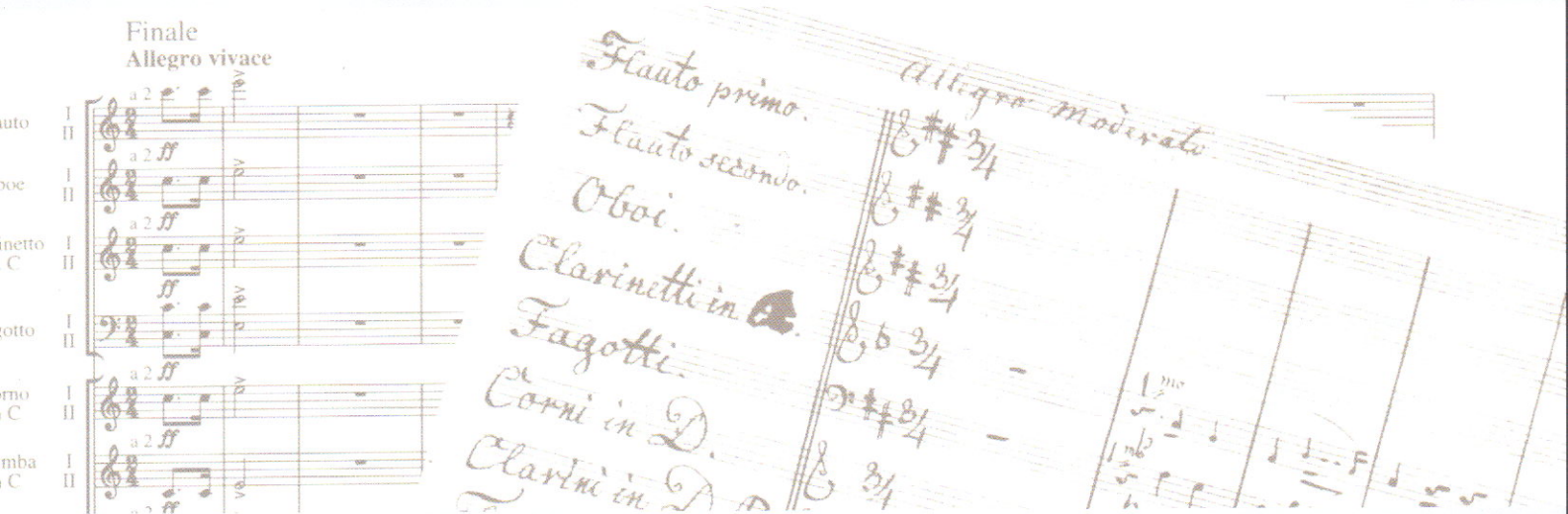




Ensemble Dimanche

アンサンブル ディマンシュ 第95回演奏会



2024年9月23日(月・祝)

調布市文化会館たづくり くすのきホール

【プログラム】

シューマン	序曲「ヘルマンとドロテア」 Op.136
ブルクミュラー	交響曲第2番ニ長調 Op.11 (シューマン補筆完成版)
	♪ ♪ 休憩 ♪ ♪
シューベルト	交響曲第8(9)番ハ長調 D944 「グレイト」

【曲目紹介】

～シューマンの功績～

ロベルト・シューマン(1810-1856)は、作曲家としてはもちろんですが、音楽史上いろいろな功績を残しています。例えば、ブラームスが作曲家として世に知られるようになったのは、シューマンのお蔭だと言われています。今回のプログラムでは、後代に影響を与えたシューマンの序曲とシューマンがいなければ世に出なかったかもしれない2つの交響曲を取り上げ、シューマンの足跡の一部をたどります。偶然にも、いずれの曲もそれぞれの作曲家の最後の管弦楽曲となっています。

◆シューマン:序曲「ヘルマンとドロテア」～「ラ・マルセイエーズ」が引用された序曲

この曲は、ゲーテの恋愛叙事詩「ヘルマンとドロテア」を題材として1851年に書かれた「演奏会用序曲」です。この叙事詩では、ドイツの青年ヘルマンとフランス革命によって国を追われてきた少女ドロテアの出会いから結婚までが、9編の詩で描かれています。

この曲の楽器編成をみると、トロンボーンとティンパニを欠き、代わりにピッコロと小太鼓が加えられています。他の管弦楽曲のような重厚な響きはなく、その意味ではシューマンらしくない曲ですが、途中に出てくるモチーフには、やはりシューマンの香りが漂っています。

序奏はなく、ヴィオラ、チェロとファゴットによる哀愁を帯びた主題に始まります。三連符の連続したこの主題は、20年後に書かれたサン・サーンスのチェロ協奏曲第1番を連想させます。その主題に、木管楽器がフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」で応答します。この二つの主題は形を変えて何度も繰り返され、展開していきます。

「ラ・マルセイエーズ」は、シューマンが1840年に書いた歌曲「二人の擲弾兵」でも使われています。この歌曲は、ナポレオンのロシア遠征時に囚われていた二人のフランス人兵士が故郷に帰る様を描いたハイネの詩に曲を付けたものです。また、「ラ・マルセイエーズ」が使われた曲と言えば、同じくナポレオンのロシア遠征を題材としたチャイコフスキーの序曲「1812年」が有名です。チャイコフスキーはシューマンを尊敬していた作曲家の一人で、シューマンの影響を受けた交響曲(第3番)などを書いています。もしかしたら、序曲「1812年」もシューマンの影響を受けているのかもしれませんが。

◆N. ブルクミュラー:交響曲第2番ニ長調Op.11 ～シューマンが補筆し完成させた交響曲

「ブルクミュラー」というと、子供のためのピアノの練習曲を書いた作曲家を思い浮かべるかもしれませんが、それはフリードリヒ・ブルクミュラーです。今回取り上げるノルベルト・ブルクミュラー(1810-36)は、フリードリヒの3歳下の末弟に当たります。ブルクミュラーは、ドイツのデュッセルドルフでシューマンと同じ1810年に生まれ、メンデルスゾーンやシューマンとも交流があったようですが、26歳の若さで突然死してしまいます。死因は、パリへ行く途中、アーヘンという町のスパに立ち寄り、入浴中にてんかん発作を起こしての溺死だと言われています。過渡に飲酒をしての入浴が要因のようです。メンデルスゾーンは夭逝した作曲家の死を悼んで管楽合奏のための葬送行進曲(Op.103)を書いて葬儀で演奏しています。(ここだけの話ですが、本日のアンコールでこの葬送行進曲の管弦楽版を演奏する予定です。)

この曲は、1834年に書き始められましたが、第3楽章の途中までスコアが書かれたところで作曲者の死によって中断されてしまいました。完成していた第1・第2楽章については、1837年4月にデュッセルドルフで初演されています。中断していた第3楽章は、シューマンによって補筆完成されます。とは言え、「スケルツォ」で終わっているこの交響曲は、「未完成」であることに違いありません。第4楽章については、近年までその存在が知られていませんでしたが、1983年に第4楽章らしき58小節のスコアが発見され、さらに1988年には、シューマンのミサ曲Op.147の手書譜の中から同121小節のスケッチが発見されています。シューマンは、生存中にこの曲を出版していないので、第4楽章も手掛けるつもりだったのかもしれませんが。

第1楽章 Allegro moderato ニ長調3/4拍子

序奏はなく、チェロのアルペジオ(分散和音)のモチーフに始まり、木管楽器が別のモチーフでこれに応えます。ソナタ形式でできていますが、いくつかのモチーフの組み合わせや展開によって楽章全体が構成されています。モチーフの中には、「ベト7」(ベートーヴェンの交響曲第7番)第4楽章のパロディらしきものやシューマンが第2番の序奏に引用したと思われるものなど、どこかで聴いたようなものが多数出てきます。ニ長調、3/4拍子で、田園風景を思わせる楽章ですが、このことは、ブラームスの第2番やドヴォルザークの第6番と共通しています。

第2楽章 Andante ロ短調2/4拍子

2小節の序奏ののち、メトロノームのような八分音符の伴奏にオーボエがもの悲しい旋律を奏でます。この構造はシューベルトの「グレイト」同楽章と酷似しています。しかし、「グレイト」がシューマンによって発見されるまでに演奏された記録はないので、ブルクミュラーが「グレイト」を聴いて影響を受けたとは考えにくく、偶然の一致と思われます。この旋律は第二主題を挟んで何度も出てきます。最後はヴィオラの嘆きとともに静かに終わります。

第3楽章 Scherzo, Presto ニ長調3/4拍子

スケルツォとトリオです。低弦から高弦へ順番に駆け上がっていくと、アクセントの付いた二つの和音が解決します。途中フリアント(チェコの民族舞曲)のようなアクセントのリズムが続き全体を支配しますが、このリズムは、ドヴォルザークの第6番を連想させます。トリオはホルンとファゴットの四重奏による雄大な舞曲から始まります。スケルツォに戻ってコーダに入ると、最後は心残りがあるかのごとく静かに終わります。第4楽章があれば続けて演奏されたのではないのでしょうか。

◆シューベルト:交響曲第8(9)番ハ長調「グレイト」～シューマンが発見した交響曲

シューマンは、ウィーン滞在中の1839年1月、シューベルト(1797-1828)が生前使用していた部屋を訪れ、そこで長大なハ長調の交響曲の自筆譜を発見します。そして、シューベルトの遺産などを管理していた兄のフェルディナント・シューベルトの許可を取り付けて、その交響曲の自筆譜をライプツィヒにいたメンデルスゾーンの下に届けます。この交響曲は、同年3月にライプツィヒにおいてメンデルスゾーンの指揮で初演されることとなります。

この曲は、近年の研究で、1825年5月から9月の間の国内旅行中に書かれた交響曲であるというのが定説になっています。前年の1824年5月には、ベートーヴェンの「第九」が初演されており、この曲が長大(指示どおり繰り返すと約1時間)なのは、「第九」の影響と思われます。第4楽章の展開部には「歓喜の歌」のパロディらしき旋律も出てきます。また、第3楽章のトリオの旋律は、当時ウィーンで流行していたフランス民謡「マルブルー公は戦場に行った」に似ていますが、この民謡はベートーヴェンの「ウェリントンの勝利」にも引用されています。「ウェリントンの勝利」は「第九」初演時のプログラムの一つなので、シューベルトはその演奏会を聴いてこの民謡を取り入れたのかもしれませんが。

この曲の「グレイト」(「ザ・グレート」、「グレート」など)という愛称は、同じハ長調の交響曲が別に1曲あり(のちの第6番)、それと区別するためにイギリスの出版社が「The Great C major(大ハ長調)」と名付けたことに由来します。「Great」を日本語に訳すと「偉大な」というイメージが強いですが、この場合は単に規模が大きいという意味合いしかありません。

シューベルトの交響曲番号については、未完成なものをどこまで含めるかで、時代とともに変遷しています。この曲は、当初「第7番」でしたが、1951年にシューベルトの作品を整理した音楽学者ドイチュ(作品番号のDはドイチュの頭文字)によって「第9番」へと変更されました。これは、大部分がスケッチのハ長調の交響曲が「第7番」として加えられたことによるものです。さらに1978年には、別のドイツの学者によって、そのハ長調の交響曲が除外され、いわゆる「未完成交響曲」が「第7番」、この曲が「第8番」へとずれ込みました。しかしながら、「未完成」=「第8番」というイメージが根強く、この変更への抵抗勢力が大きいのも事実で、特に英語圏を中心とする学者は、未だにこの曲を「第9番」としています。そのため、折衷案として「第8(9)番」と表記されることが多くなっています。ちなみに、ウィキペディアの日本語版では「第8番」、英語版では「第9番」となっています。また、近年、没年に書かれた交響曲のスケッチが補筆完成されて「第10番ニ長調」として演奏されているので、さらに複雑化しています。

第1楽章 Andante - Allegro ma non troppo ハ長調4/4拍子-2/2拍子

序奏は、ホルンの雄大な旋律で始まり、シューベルトらしい優雅な旋律が続きます。主部に入ると、弦楽器ユニゾンの付点のリズムが続く第1主題と木管楽器による短調の第2主題が続きます。コーダでは、序奏の旋律の断片が堂々と再現されて終わります。長い優雅な序奏とリズムックな主部は、「ベート7」の影響でしょうか。

第2楽章 Andante con moto イ短調2/4拍子

複合三部形式とも自由なソナタ形式とも言われています。メトロノームのような八分音符のリズムにオーボエが哀愁を帯びた旋律を歌います。この主題は変奏されて何度も繰り返されます。第2主題は、第2ヴァイオリンによってシューベルトらしい優雅な旋律が歌われ、第1ヴァイオリンがそれを引き継ぎます。

第3楽章 Scherzo, Allegro vivace ハ長調3/4拍子

レントラー(ドイツ南部・オーストリア地方の古い舞曲)風のスケルツォです。トリオはイ長調に変わり、木管楽器が長々とフランス民謡風の旋律を歌い、低弦と高弦が交互に「・タタター」というリズムをひたすら(約140回)繰り返し伴奏します。弦楽器奏者にとっては試練の時です。

第4楽章 Finale, Allegro vivace ハ長調2/4拍子

付点のリズムと三連符が交錯する第1主題で始まります。この二つのリズムは、楽章全体を支配しています。木管楽器が歌う第2主題は行進曲風の旋律の裏に三連符のリズムで伴奏しています。展開部に入ると、提示部のコーダを基にした新たな主題が出てきますが、この主題は「第九」の「歓喜の歌」のパロディと思われます。

【指揮者プロフィール】

平川 範幸
(ひらかわ のりゆき)



福岡県出身。福岡教育大学卒業。上野学園大学研究生＜指揮専門＞にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣、沼尻竜典の各氏に師事。音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。

東京音楽大学特別講座にて、パーヴォ・ヤルヴィの指揮公開マスタークラスを受講。その模様がNHK「クラシック音楽館」にて放送される。

新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京、東京フィルハーモニー交響乐团の下で活動する。その後東京シティ・フィルハーモニック管弦乐团指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎、矢崎彦太郎の各氏をはじめとする指揮者の下で研鑽を積む。

2016年、サントリーホールで開催された「こどもたちのコンサート」特別公演にて、ウィーン・フィルのメンバーと仙台ジュニアオーケストラの合同演奏を指揮する。同年、浜松フィルハーモニー管弦乐团の演奏会にて、ベルリン・フィルのオーボエ奏者、クリストフ・ハルトマンやクラリネット奏者のヴェンツェル・フックス、ホルン奏者のシュテファン・ドゥ・ルヴァル・イエジエンスキーの各氏らと共演する。

これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦乐团、大阪交響乐团、オーケストラ・アンサンブル金沢、仙台フィルハーモニー管弦乐团、千葉交響乐团、九州交響乐团、東京混声合唱団、広島ウインドオーケストラなどを指揮する。2016年より2021年まで、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督を務める。

♪ 第95回出演者 ♪

ピッコロ	上野京子
フルート	谷口玲子 徳植俊之
オーボエ	市川亜理 伊藤佐保子 山口高司
クラリネット	鈴木千暁 中嶋智子
ファゴット	越島康太郎 築山道乃 星野未央
ホルン	尾形武一 友田昭博 町田明子 由川 裕
トランペット	内田直大 木村 晃
トロンボーン	鴨川友輔 高橋 滯 鶴間紀子
パーカッション	星野武徳

第1ヴァイオリン	◎時山響子 三瓶政一 西村 実 宮本 敦 本山まり子 油谷伸一
第2ヴァイオリン	○森 未知 相羽あゆみ 石嶺寿子 西川富之 松前 巖 森上由紀
ヴィオラ	○関口孝司郎 柴野かおり 下山純也 山口 彰
チェロ	○植田圭司 緒方 淳 永田隆司 中山憲一 藤村ゆ香 三次摂子
コントラバス	○須賀敬亮 江川博之

◎コンサートマスター ○弦楽トップ

トレーナー	戸澤哲夫 (東京シティ・フィルハーモニック管弦乐团コンサートマスター)
練習指揮	山上孝秋

♪ 次回の演奏会ご案内 ♪

日時：2025年3月15日(土) 14:00開演
場所：調布市グリーンホール 大ホール
曲目：ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調Op. 125「合唱つき」他
指揮：平川 範幸
合唱：フィルハーモニッシャーコール



詳細はHP <http://www.e-dimanche.jp/> をご覧ください。
※招待券をご希望の方は、アンケートにご記入ください。

本日のアンコールについて

本日のアンコールは、

メンデルスゾーン：葬送行進曲 Op. 103 （管弦楽版） より
でした。

プログラムの曲目紹介「ブルクミュラー：交響曲第2番」にあるとおり、メンデルスゾーンが若き作曲家の死を悼んで作曲し、その葬儀で演奏されたと言われる「葬送行進曲」です。原曲は管楽合奏のために書かれていますが、本日は管弦楽のために編曲された版で演奏しました。

Norbert Burgmüller



1810 - 1836

アンコールに「葬送行進曲」を演奏することの是非はあるかもしれませんが、実は、本年2月、当団の創立者、初代常任指揮者の御息女が40歳という若さで旅立ちました。子に先立たれる親の哀しみもさることながら、親よりも先立つ子の無念は計り知れません。今回のアンコールは、その追悼の意を込めて、この曲を選びましたので御理解願います。